

小特集・ジェンダー・フリーについて

本誌の小特集も、四回目を迎えました。これまでは、今日の時代が、わたしたちに提示していると思われる課題と、それに対応しているテキストを設定し、それを参考に編集同人が、四百字七枚程度の小論やエッセーを書いてきました。今回のテーマは「ジェンダー・フリーについて」です。ジェンダーとは、社会的な男女の性別のことです。そしてジェンダー・フリーとは、性別による旧来の役割意識にとらわれず、それぞれが自分の個性能力を生かして、自由に生きようという意味です。とりあえず、性格の異なる三冊の参考文献を設定しました。それらは斎藤美奈子『モダンガール論』（文春文庫）、治部れんげ『男女格差後進国』の衝撃——無意識のジェンダー・バイアスを克服する』（小学館新書）、小川たまか『ほとんどない』ことにされている側からみた社会の話を』（タバブックス）などです。ただ、これは参考に過ぎません、別の書を取り上げても、これらを直接に批評の対象にしてもしなくてもいい、ということをお前提にして、〈私〉のジェンダー・フリーについて考えてみました。

見ないフリがうまい〈世界〉への応答

池上貴子

欧州発で古くは十八世紀から続くフェミニズムや、その流れを受けアメリカで始まったウーマン・リブといった女

性解放運動の言葉に代わり、近年では「ジェンダー・フリー」という言葉が、女性だけでなく男性への差別や、LGBTQ、性自認の尊重など社会的性差の課題を包括的に含む語として使用されている。特に、国連が掲げた、世界が共有すべきSDGs（持続可能な開発目標）に「ジェンダー平等を実現しよう」という目標が掲げられたのは広く知られるところだろう。このような国際社会の動きを知る

と、性差別解消の働きかけがようやく実り、今度こそ実現されるのではと期待する人もいるかもしれない。

しかし、果たして世界はそんなに甘く単純だったろうか。おそらく、今回の対象本として選ばれた三人の著者たちは全くそう考えてはいないだろう。二〇〇〇年代以降に発行されたこれら三冊のジェンダー論はいずれも用心深く周到だ。国家や社会が表層的に描き出す単純な世界の未来図と、その深層にある複雑で堅牢な世界とを冷静に踏まえた上で対抗しようとしているように私にはみえる。

したがって、三冊の読書体験において最も興味深く考えさせられたのは、恐ろしく長い間続けられてきた女性たちの抵抗と差別解消への戦いが、一九九〇年代以降に戦略を大きく変えたことの意味だった。

斎藤美奈子は『モダンガール論 女の子には出世の道が二つある』（二〇〇〇年十二月、マガジンハウス）の中で、『青踏』発行以降の雑誌新聞記事を例証に、女性差別解消運動に関する言説が、「女だてらに」「女のくせに」と揶揄うことよって忌避されてきた「女性運動の歴史」に言及する。女性差別は「公」の差別（就職・受験・法律）と、「私」の差別（家事・育児・性）が混在するため、たとえば人権に抵触しようとも、男女ともに見て見ぬふりをされることで、「日常」や「習慣」に同化してきた。いわば、差

別解消運動とは、「見ない目に入れ、聞かない耳に入れる」ことの困難と挫折の歴史でもあろう。斎藤はこの〈習慣が認知の耳を塞ぐ《日常》の堅牢さ〉を過去の言説から熟知し、繰り返し女性差別の不毛な戦いを突破するために、まずは読まない人に読まれること、耳に入れない人の耳に入れることに舵を切っている。そのため、斎藤は暗く深刻な女性差別の現状や耳に痛い男性批判を前面に出さない。「女の子」の「出世したい」という気持ちを「欲望史観」で辿ってみました、というポジティブなスタンスを取るの

である。そのうえで、当時の新聞雑誌の記事やデータを援用し、時代に置かれた女性達を取り巻く状況を浮き彫りにして、「がんばってる（でもがんばれない社会、どん詰まりの私）」状況を自発的に読み取らせていく手法をとった。

他の二人の著者もまた、いずれも手に取り読みやすく編集されており、「耳に入れない人」の「耳」に入れるという難題から目を逸らしていないことがわかる。小川たまか『ほとんどない』ことにされている側から見た社会の話を。（二〇一八年七月、タバブックス）は、性暴力・性被害という忌避されがちなテーマを扱いながら、あえてタイトルには、「女性の側」という言葉ではなく、「『ほとんどない』ことにされている側」という絶妙な表現をして、読み手の間口を広げてみせた。痴漢加害者側の心情や、ヘレ